

○花崎正子(東筑紫短大) ・ 平田 昌(元福岡教育大)

河野孝子(西九州大家政) ・ 赤星礼子(佐賀大教育)

家政学における高齢者の生活研究として、今日まで、我々が実施してきた研究全体の流れは次の通りである。仮設樹立→調査→解析→方法的不備への反省→家政学的理論の再解明→理論検討→再び調査研究仮設の樹立へ→(家政学視点での解析)。その中で、我々が行った「研究方法的不備への反省」「家政学的理論の再解明」「理論検討」は次の様な事柄であった。すなわち、

①「生活」をいとなむ(function)主体的立場が“人”それ自身にあるという考え方に立つということ。②“人”自身が追求する「よりよい生活」は、家政学が求める基本的視点であるが、何をもって「よりよい」とするかは、価値比較、価値選別にかかわる“価値”の問題である。ここでの“価値”は、形而上的絶対価値を意味するものではなく、実践科学が基本的性格として具備している相対的価値としての問題である。③今日「生活」把握を“システム論”を基軸とする論は少なくなりが、家政学として求める「生活」把握には、従来の一般的システム論では限界がある。また、家政学研究として既に述べられている“システム論”にも限界があり、それは、システムの出発点と帰着点の不明確性にある。

したがって、上記認識にもとづき、「よりよい生活」概念を明らかにする。さらに家政学としての“システム論”の整備と樹立が急がれるが、「生活」の統合性を把握するために、先ず、「生活」の静態的・構造的把握として、既に位置づける試みた“生活構造論”を用い、「生活の構造的把握」を行い、その解析を経てシステムの展開へ発展させ、「生活」の動態的把握へつなげたい。